

カスガイ膏の伝承について

——アンブロアズ・パレとわが国の外科——

大村敏郎

アンブロアズ・パレの全集は最初に到来した系統だった西洋外科書として、わが国に大きな影響を与え、その一部が訳されて初期のものは出版物ではなく手書き本のまま世に出たことはよく知られている。また多数含まれている図の部分だけを取り上げた絵巻物になっているものも各地に散在している。

これらの、わが国で画かれた外科図を見ているうちに、女性の頬の傷の処置として行われる「カスガイ膏」の図に、原著のフランス語版では一本しかない針が、日本ののは全部二本に増えており、しかもその針がわずかが曲っていることに気づいて、その伝承の経過を興味をもって追っていたところ、オランダ語版にその原因を見出すことができたので、昨年七月の医史学会例会（東京）で発表した。

日本に最初に届いたパレ全集は一六四九年アムステルダムで出版されたオランダ語版であった。蘭館医ウィレム・ホフマンの署名がついており、楯林家に伝わっていたが、東京帝大に寄贈された後、震災で焼失してしまったと伝えられている。この本については古賀十二郎氏の書物に写真が残っているのだが、オランダの出版社のことについては何も触れていない。実は一六四九年にアムステルダムから二つの異なった版が出版されている。一方は一五九二年カロルム・バットム訳のオランダ語初版以来の木版を踏襲しているウィルムス版である。それによると針がやや曲っていることと、糸の他端が折れ曲ってやや太くなっており、針と見まちがえかねない図になっている。これをわが国の絵師が取りちがえて二本の針にしたものと私は推定しているが、もう一方の一六四九年シッペル版はこの版から新しい木版を採用することによって、明らかに二本のやや曲った針が両端針の形でついている図に変っているのである。すぐ横に直針の図が画かれているにもかかわらず……である。この図を昨年春適塾の展示で確認できたので、最初に日本に到来したのはシッペル版の方であるとカスガイ膏の

図から同定することができたのである。

カスガイ膏は、原著には特にこの方法に名前はついておらず、美しい女性の場合癩痕を小さくするための方法として、創の両側に二枚の布を距離をはなして貼りつけ、その布の端を糸で縫い寄せるようにと書いてある。パレの全集の中では珍しい女性の絵である。わが国の絵には美しい顔もあるが、女子供に行うとよいと伝えられ、十七日間そのままにしておくと原著にはない注意が書きそえられている。

パレの時代（十六世紀）に直針も曲針も存在していた。いずれも角針である。しかしオランダ版も日本の図も曲針にしては曲り足らず、外科手技上の改良と考えるよりも、出版の際の作図上のまたは木版上の不備と考えるべきであろう。

模写をする時、極端に拙劣な場合を別にして、変形が起る理由として一部をまちがって写す場合と写し落してしまふ場合とが存在する。前者の場合どちらが元本かを決めることは容易でないが、針の数については出版年号で前後を明らかにすることができた。

書き落しの場合、一部が欠落している図の方が後からできたものと考えやすい。その観点からカスガイ膏の図をみなおすと、初期のものには針について縫合糸が画かれている。彩色のついているものでは白色の糸として見ることが出来る。それが十八世紀末に近づくると糸が姿を消してしまふのである。

糸があるのは長崎大学にある紅夷外科宗伝、西玄哲の金創跌撲療治の書、伊良子光頭の外科訓蒙図彙であり、糸がないのは神戸の南蛮美術館の吉雄耕牛の巻物、平戸の観光資料館にある広田寿仙の巻物、それに杏雨書屋にある紅夷外科宗伝などである。特に最後の嵐山本と呼ばれている杏雨書屋の紅夷外科宗伝は最も充実したそして保存のよいものとして定評のあるものである。

この二つの紅夷外科宗伝を比較すると、長崎大学本は二巻で絵が途中に挿入されているが、嵐山本は六巻あって、絵はまとめて別の巻になっている。このことと、今回発表の目安にしたカスガイ膏の図からいうと、長崎大学の紅夷外科宗伝が糸も画かれている上に、女性の服装も細かな模様が写されていて西洋の雰囲気を保っており、一番原典に

近い古いものといえよう。それに対して嵐山本は改訂版に相当するもので、楢林鎮山の手を離れてからさらに充実したものになった可能性がある。

フランス本国でも、パレ全集が出版されて二世紀半もたった一八四〇—四一年にマルゲーニュによって大幅に組変えられ、パレ全集完全本として復刻された例がある。

(川崎市立井田病院・慶応義塾大学医史学研究室)

日葡辞書から見た安土桃山時代

の医学——四、生理並びに病理現象

龜 節 子

『日葡辞書』の成立当時、わが国では、『啓迪集』（曲直瀬道三著、一五七四年）と『外療新明集』（鷹取秀次著、一五八一年）という、内科と外科のそれぞれの領域で、重要な二つの医書が著わされている。これらの医書には周知のように多数の医学用語が記載されているが、医家の手になる書物の性格上、その大半はいわゆる専門用語に限定されている。それに対し、一般民衆の日常語をも豊富に収録している『日ポ』では、専門書のみからでは期待することのできない用語をも見出すことが可能である。こうした点を踏まえながら、今回は、『日ポ』の中から生理並びに病理現象に関する語を拾い上げ分類、整理を試みたので、若干の特徴や問題点と共に紹介する。

生理現象に関するもの一二語、病理現象に関するもの